

## 北越雜記

文政年間。長沼寛之輔著。1は柳田国男「山の人生」より孫引き。2は岡村書店刊(1936年)『北越雜記』より。

1

妙高山・焼山・黒姫山くろひめやま皆高嶺にて、信州の飯綱・戸隠いづな とかくし、越中の立山まで、万山重なりて其境幽凄ゆうせいなり。高田の藩中数十軒の薪まきは、皆この山中より伐出す。凡そ奉行およより木挽ぶぎよう・杣こびきの輩そま やからに至るまで、相誓ひて山小屋に居る間、如何いかなる怪事ありても人に語るあこと無し。一年升山某、役に当りて数日山小屋に在りしが、夜は人々打寄りて絶えず炉に火を焚きてあたる。然るに山男と云ふもの、折ふし来ては火にあたり一時ばかりにして去る。其形人に異なること無く、赤髮裸身灰黒色にして、長たけは六尺あまり、腰に草木の葉を纏まとふ。更に物言ふこと無けれども、声を出すに牛のいばふ如く聞ゆ。人の言語はよく聞分くる也。相馴あいなれて知人の如し。一夕升山氏之に向ひて、汝木葉を着るは恥おそることを知るなり。火にあたるは寒さを畏るゝなり。然らば何ぞ獣の皮を取りて身に纏はざるやと言ひ

しに、つくぐくと之を聞きて去れり。翌夜は忽ち羚羊二足を  
両の手に下げて来り、升山の前に置く。其意を解し、短刀も  
て皮を剥ぎて与ふれば、山男は頻りに口を開き打笑ひ、悦び  
て帰りぬ。すでにして又来たるを見れば、さきの皮一枚は、  
藤を以て繋ぎ合せて背に負ひ、他の一枚は腰に巻き付けたり。  
されど生皮を其のまゝ着たる故、乾くにつれて縮みより硬ば  
りたり。皆々打笑ひ、熊の皮を取り、十文字にさす竹入れ、  
小屋の軒に下げて見せ、且つ山刀一挺を与へて帰らしむ。其  
後数日来ずと謂へり。

2

善光寺道名所圖云人皇六十三代冷泉院の御宇安和二年當國  
戸隠山に活鬼紅葉といふ妖賊住て人民を残害す此由皇聴に  
入れれば急ぎ退治すへしとて平維茂に勅命あり、維茂まつ北  
向觀音日吉八王子權現に祈願を籠戸隠へ發向し賊主を打取  
りしかは活鬼紅葉の魂魄大天狗小天狗と形をあらはし八丈  
坊九丈坊と名乗日吉權現の眷属と成り北向山を守護せんと  
誓ひけり、維茂輒く賊徒を亡し民の患を除きしかは帝叡感斜

ならず維茂を將軍に任す、又坂上田村麿鈴鹿山の群盜を誅し  
て終に天下の憂を除く、それこれを以考るに酒吞童子は鬼に  
あらず賊の長ならん。